ヨコハマ市民まち普請事業

整備事例集 vol.14

令和元年度整備事例集

私たちのまちを
私たちでつくる
きっとまちが好きになる

掲載事例

①歴史と環境をテーマに安心して楽しめる里海公園づくり（金沢区）
②鶴見の多文化・多世代の共創拠点づくり まちのリビング（鶴見区）
③世代を超えた集いの場にするための拠点づくり（南区）
④太陽とコミュニティで耕すもろおかエコステーション（港北区）
④は平成29年度整備

ふ-しん【普請】「普く請う（あまねくこう）」とも読み、「力を合わせて作業に従事すること」という意味が含まれています。
「公共」は行政によってのみ担われるものではなく、特に地域に根ざした身近な課題への対応などに市民の皆さんが主体的に関わることで、参加する人や地域に暮らす人々の満足感を高めることにつながっていきます。「まち普請」には、市民に身近な「まち」に「普請」の輪を広げていきたいという願いが込められています。

「ヨコハマ市民まち普請事業」とは

市民の発意とアイデアによる地域課題の解決や魅力向上に資する施設（ハード）を、身近な地域の公共空間や私有地などに整備する提案を募集し、二段階の公開コンテストにより選考された提案に対して次年度に最大500万円の整備助成金等を交付する事業です。

コンテストの年度 → **整備の年度**

自ら主体となって生活環境の整備をしたい市民グループ
→ 4月上旬～6月上旬 整備提案募集
→ ヨコハマ市民まち普請事業部会による選考（学識経験者・まちづくり実践者・市民委員（公募））
→ 7月上旬 一次コンテスト開催
→ 9月中 活動懇談会
→ 1月下旬 二次コンテスト開催
→ 市民自ら整備・維持管理を実施 整備助成金として最大500万円を交付

横浜市地域まちづくり推進委員会

ヨコハマ市民まち普請事業部会委員（平成30年度選考委員）※所属は平成30年度時点

岡本 溢子	NPO法人さくら茶屋にししば理事長（まちづくり・市民活動）
男澤 誠	市民（公募委員）
河上 牧子	明治大学地域ガバナンス研究所客員研究員（都市政策）
川原 晋	首都大学東京※都市環境学部教授（市民主体の地域運営・まちづくり市民事業）※現在は東京都立大学
塩入 廣中	市民（公募委員）
菅 博嗣	（株）あいランドスケープ研究所代表取締役（花とみどり・公園緑地）
杉崎 和久	法政大学法学部教授（公共政策）
鈴木 やよい	NPO法人横浜市民アクト理事（まちづくり）

ヨコハマ市民まち普請事業
整備事例集 vol.14
令和元年度整備事例集

●発行　令和3年2月
横浜市都市整備局地域まちづくり課
〒231-0005 横浜市中区本町6-50-10　TEL 045-671-2679　FAX 045-663-8641
●編集・デザイン　横浜市住宅供給公社
●デザイン・印刷　山陽印刷株式会社

あちこち・ドキドキ・ハマのまち 都市整備局

「まち普請事業」についてはホームページをご覧ください。
https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/suishin/machibushin/

Webで検索 まち普請 検索

Facebook「ヨコハマ市民まち普請ひろば」もご覧ください。
https://www.facebook.com/yokohama.machibushin

Webで検索 まち普請ひろば 検索

整備事例 1

歴史と環境をテーマに安心して楽しめる里海公園づくり（金沢区）

～水辺のウッドデッキが地域の新たな舞台へと

水辺に向かって設置されたウッドデッキ

並木団地の真ん中にある「ふなだまり」は、池のように見えますが、海につながっている入江です。そこにあるウッドデッキでは親子がお弁当を食べたり、おしゃべりをしたり、みんなが思い思いに過ごしています。人を引き付ける気持ちの良いこの「ふなだまり」は、富岡八幡宮の祇園舟神事を行う非常に由緒ある場所でもあります。しかし、地形的に海と住宅地から流れてくるごみが溜まりやすく、以前は大人が子どもたちに「汚くて、危険だから近寄ってはダメ」と言うような場でした。

並木団地に建設当初（昭和40年代）から住む高島さんは、定期的に水辺のごみ拾いをしていましたが、水面に浮かぶごみの回収は難しく、限界を感じていました。そんなある日、SUP（サップ）※1で水面のごみ拾いをしている人を見かけます。それが富岡に住む赤澤さんでした。彼らは「ふなだまり」をもっと面白い場にしたいと意気投合し、「富岡・並木ふなだまりg-ionbune公園愛護会」を結成します。「陸と海を同時に清掃しないと、この公園はきれいにならない」と考え、自転車やSUPを使って楽しみながら新しいスタイルの清掃活動を始めました。

40代の赤澤さんはアイデアマンで、「ふなだまりをもっとアピールするには拠点が必要だ」と、地域のボート小屋を改修するために、ヨコハマ市民まち普請事業に応募することを提案します。高島さんやメンバーの松尾さんたちは、そんな赤澤さんと周りの若い世代の熱意に押され、まち普請へ挑戦することを決めました。

近隣の小学生にふなだまりについてレクチャー。デッキが青空教室に

無事に一次コンテストは通過したものの、権利上の問題によりボート小屋を使用することができなくなってしまいますが、諦めずに、水辺にウッドデッキをつくる内容に提案を練り直しました。整備場所は変わりましたが、水辺の価値を高めることが評価され、見事二次コンテストを通過することができました。

しかし、いざ整備を始めようとした矢先、中心メンバーの赤澤さんが急逝されます。メンバーは大変ショックを受け、一時は整備をやめることも検討しますが、高島さん、松尾さんが中心となり赤澤さんの遺志を継ぐことを決意し、なんとか令和2年2月にウッドデッキを完成させることができました。

コロナ禍により予定していたイベントはすべて中止となり、積極的なPRができませんでしたが、ウッドデッキを利用する人たちは徐々に増えています。ふらっと立ち寄る人以外にも、ヨガで使われたり、フラダンスグループが練習したり、小学生の野外教室など様々な使い道が生まれています。最近ではテレビ番組のロケ地となったり、アートグループから「イベントをしたい」という申し込みがあるなど、想像していなかった幅広い人たちに知られるようになってきました。ウッドデッキがふなだまりの良さを引き出し始めています。

愛護会メンバーで並木団地で育った二見さんは、並木団地には様々な特技や知識のある面白い人がたくさんいるのに、その人たちと交流する機会がないことをもったいないと感じていました。それが、ウッドデッキという舞台ができたことで、地域の活動が次第に見えてきたのです。「これまで新陳代謝ができなかったけど、ウッドデッキによって地域に意識が向いた人たちと『この町に住んでよかったな』と思う企画をやっていきたい」。二見さんの言葉には、夢と可能性があふれています。

高島さん、松尾さんは「とりあえず、5年間はやってみますよ」と若い世代をバックアップする気持ちです。「水辺はパワーがある。だからどう利用するかを考える人たちと共にまちをつくっていきたい。それを可能にしてくれたのは、まち普請だと思います」とまちの未来を見つめています。

苦労があったからこそ光が見えてきた。ふなだまりの今後に注目しましょう。

日常的に太極拳やフラダンスの練習場所にもなっている

※1：「Stand Up Paddle board（スタンドアップパドルボード）」の略称。ボードの上に立ち、パドルを使って水面を漕いで進んでいくウォーターアクティビティ。

歴史と環境をテーマに安心して楽しめる里海公園づくり（金沢区）

整備主体…富岡並木ふなだまりg-ionbune公園愛護会
整備場所…金沢区富岡東4丁目13番
富岡並木ふなだまり公園内
整備内容…ウッドデッキ
竣工時期…令和2年2月

整備事例 2

鶴見の多文化・多世代の共創拠点づくりまちのリビング（鶴見区）

～地域に循環を生み出す230cafe（つみれカフェ）

鶴見駅周辺は喫茶店や居酒屋が多く、賑わいのある街ですが、日中に市民が活動できる集いの場が多くありません。鶴見駅西口には平成22年にまち普請で整備された「鶴見ふれあい館（令和2年9月閉館）」がありましたが、東口には公共施設を除きそのような施設がなく、つみれプロジェクト実行委員会の須田さんは「多世代で気軽に集まれる場所があるといい」と考えていました。

平成29年に須田さんは地域の子育てママ支援グループと一緒に、地域の拠点づくりを目的にまち普請に応募しました。一次コンテストを通過しましたが、鶴見駅周辺は家賃が高額で最終的に条件に合う物件が見つからずに辞退することになってしまいました。その後、まち普請の応募をあきらめていましたが、これまでの活動でつながったビルのオーナーから「アパートをビルに建て替えるけど、2階のフロアで活動してみない？」と声をかけられます。「これを逃がせば、次のチャンスはない！」と考えた須田さんは再度まち普請に挑戦することを決めました。

しかし、以前一緒にまち普請に応募したグループは他の活動を始めていたので、新しくメンバーを集めることになりました。鶴見区で外国人の子育て支援の仕事をしていた福徳さんは、

座敷もあり乳幼児連れでも使いやすい。
小箱ショップも併設し特産品の委託販売も行なっている

ご自身も近くに親や親せきがいない中での子育てに孤独を感じ、色々な人たちとつながりたいと思っていました。二人は商店街のイベントで知り合ったのですが、須田さんが拠点を整備しようと動いていることを知った福徳さんも、活動に参加するようになりました。そうやって集まったメンバーで立ち上がったのが、つみれ(つるみの みらいをつくる れんけい)プロジェクト実行委員会です。

二次コンテストでは、過去にまち普請で提案した「孤立した子育て・ひとりぼっちの子どもをなくす」という内容に、多様な国の人が住み、身の回りが多彩な国の文化で溢れているという鶴見の魅力を加えて提案しました。その後、二次コンテストに向けて地域との連携や近隣商店街での街頭インタビューを積極的に行い、メンバーが一丸となって提案内容を深めていったことで、見事二次コンテストも通過します。しかし、通過した後に待ち受けていたのが、活動の担い手の離脱です。一緒に活動をしていた若いメンバーが就職したり、別の活動を始めてしまったことで、須田さんと福徳さんは再度、一緒に活動するメンバーを探すことになりました。ビルが建設され、実際に整備に動き出すまでの期間を利用して、関わってくれる人を再び集め、整備計画や事業運営を急ピッチで検討し、遂に令和2年3月に230cafeは完成を迎えました。

DIYワークショップの様子。子どもも参加して棚などを手作りした

ところが、カフェのオープンを目前にして、新型コロナウイルスの感染拡大が本格化します。カフェのテーブルなどを手作りするワークショップは開催できましたが、その後は全くイベントができなくなり、当初予定していた事業も見合わせることになりました。どうやってカフェを維持していけばいいのか、二人は頭を抱えます。

そんな活動ができない中でも、230cafeを地域貢献の活動拠点として活用することになっていたパルシステム神奈川ゆめコープがカフェの維持に協力してくれました。その他にも地域の企業との連携や、協賛という形での応援も生まれています。また、「横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業」(通称、サービスB)※2も実施することで、地域の民生委員さんが足しげくやってきて、カフェを宣伝してくれています。西口にあった鶴見ふれあい館を利用していた高齢者も230cafeに来てくれるようになりました。色々な人たちが、230cafeを介してつながり始めています。

酵素講座の様子。地域の起業家の利用も増えており、応援し合う関係になっている

230cafeは何かを始めたい人に場所の提供もしています。ビルの前に掲げていた看板を見て、「酵素づくり」で起業した人が酵素の講座を始めました。その姿を見て、230cafeを使いたいという声が他にも寄せられています。地域に拠点ができ、実際に使われることで自分の可能性を見つけることができる、そんな良い循環が生まれ、230cafeから新しい風が吹き始めています。

「アイデアはどんどんたまっている。動けるようになったら、色々と仕掛けていきたい」と語るお二人。230cafeが今後どんな風を吹かせてくれるのか、期待が高まります。

※2:ボランティアを始めとした地域住民が、要支援者等を対象とした介護予防・生活支援の活動を行う場合に、その活動に係る費用に対して、補助金を交付する制度。

鶴見の多文化・多世代の共創拠点づくり
まちのリビング(鶴見区)

整備主体…つみれプロジェクト実行委員会
整備場所…鶴見区鶴見中央4丁目7-15-201
整備内容…コミュニティカフェのキッチン等設備および内装
竣工時期…令和2年3月

整備事例 3

世代を超えた集いの場にするための拠点づくり(南区)

~子どもと高齢者が交流する日常「おもいやりハウス」

南区中村町で子育てサークルの活動をしていた津ノ井さん、根島さん、吉永さんは、近隣のケアプラザで開催したイベントで高齢者にグッズを作ってもらったり、子どもたちが高齢者とふれあう姿を見て、多世代がつながる面白さを感じていました。そして、イベントの時だけではなく、日常的に子どもと高齢者が交流できる場があればと考えるようになりました。「子育てにはお金も必要!子育てを優先しつつ、地域を見守り働ける場所がほしい。地域にないなら自分たちでつくろう!」とおもいやり隊を結成します。

一見普通の住宅に見えるが、手すりの看板やクレープ販売のカウンターが内と外の距離感を縮めている

中村町周辺は坂が多く、高齢化も進んでいて、買い物に困っている人が多くいます。「そういう人たちのために販売会をやってみたら?」というアドバイスを受け、買い物難民が多い坂の上の地区で平成30年2月から、定期的に野菜やパンを販売するマルシェを始めました。利用者も多く、「もっと色々な商品がほしい」という声を受け、買い物代行も始めます。活動が軌道に乗ると「地域住民の交流拠点が欲しい」という思いが強くなっていきました。そんな時に、地域ケアプラザで行われた勉強会でまち普請を知り、「私たちにぴったりの制度だ!」と、すぐに応募することを決めます。

多世代が集う「銭湯」でマルシェを行うことで、地域のつながりを豊かにするというアイデアは二次コンテストを通過しますが、計画が具体化する中で様々な課題が顕在化し、別の場所を探すことになりました。地域の空き家を探し回り新たに見つけた場所も、検討を進める中で断念せざるを得なくなります。ほぼ諦めかけていたところ、地域の人の協力もあり、二次コンテストの直前にようやく場所が見つかりました。

改修もできるところは自分たちの手で行った

しかし、やっとの思いで見つけた空き家は耐震性に問題がありました。そこで耐震工事の資金を集めるために、おもいやり隊はクラウドファンディング※3にチャレンジします。ちょうど横浜市が、地域まちづくり活動を対象としたクラウドファンディングの活用支援事業(試行)を立ち上げたタイミングで、その第1号として支援を受けることが決まりました。当初は資金が集まるか不安もありましたが、銀行からの融資や他の助成金を申請する計画も合わせて提案し、無事二次コンテストを通過することができました。

地元からの寄付やクラウドファンディングで耐震工事の資金を集め、さらに人伝てで大工さんや電気屋さんに個別に掛けあい、メンバーも工事に参加するなど、何とか整備費用を抑えました。そんな苦労を乗り越え、令和元年10月に多世代交流拠点「おもいやりハウス」が完成します。

おもいやりハウスでは、「横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業」(通称、サービスB)で高齢者向けのサービスを提供したり、お弁当や駄菓子の販売を行い、大人も子どもも気軽に立ち寄れる工夫をしています。友達のお母さんが運営しているという安心感から、放課後は多くの子どもたちが集まる居場所になり始めていました。

しかし、日常的に高齢者と子どもが交流する理想の場所が出来上がった矢先に、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、おもいやりハウスは令和2年4月から2か月間休業することになります。「二次コンテストからおもいやりハウスのオープンを挟んでずっと走りつづけてきた。2カ月間休業し立ち止まったことで、おもいやりハウスが地域に何を生み出せるのか改めて考えるきっかけになった」と津ノ井さんたちは教えてくれました。コロナ禍が続く中、お弁当の販売から活動を再開して、さらにフードパントリー※4を始めるなど、こんな時だからこそ必要な取組を行っています。

「休業中にいろんなアイデアも生まれている。そのアイデアを実現していくためには、おもいやりハウスを持続させること。その鍵は資金面も含めて運営を軌道に乗せていくことにある」。休業期間中にためたパワーとアイデアをもって、次のステップへと進んでいくおもいやり隊。その中心メンバーには中村町で生まれ育った根っからの地元民がいます。地域の中では圧倒的に若手ですが、周りの人たちの期待は大きく、温かく見守られながら、おもいやり隊はこの先の未来を見ています。

（おもいやり隊は令和元年5月に法人格を取得し、現在はNPO法人おもいやりカンパニーとして活動しています）

子どもだけでも親子連れでもふらっと立ち寄れる場所に。コロナ禍明けが待ち遠しい

※3：Crowd（人々、一般大衆）とFunding（資金調達）を合わせた造語で、個人や企業、その他の機関が、インターネットを介してアイデアやプロジェクトを紹介し、それに共感し、賛同する一般の人から広く資金を集める仕組みのこと。

※4：様々な理由で生活に困っている人々に、無料で食料品などを配付する支援活動。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、十分に食事をとることのできない人々が増えたことで、この活動に取り組む人たちも増えた。

世代を超えた集いの場にするための拠点づくり（南区）
整備主体…おもいやり隊
整備場所…南区中村町2丁目124番地5
整備内容…交流拠点（空き家の改修）
竣工時期…令和元年10月

整備事例 4

太陽とコミュニティで耕すもろおかエコステーション（港北区）

～事業初の整備後の退去を乗り越えた、地域の絆のステーション

熊野の森もろおかスタイルは、東日本大震災を契機に、港北区師岡地区で、地域でエネルギーやコミュニティについて考えようと立ち上がったグループです。最初は市民共同発電所をつくろうと座学を中心に活動をしていましたが、実際に身体を動かすことも必要と考え、地域の畑を借りて、育てた収穫物をエコストーブ※5やソーラークッカー※6を使って調理するなど、災害時に地域で最低限の生活ができるよう経験を重ねていました。また、地域のつながりづくりのために、地元の高校の落語部と一緒に寄席を開いたり、野外での映画観賞会を開催したりしていました。様々な取組を通してエネルギー・コミュニティ・農・防災を軸に活動が広がっていく中で、「拠点があればもっとできることが増えるだろう」と考えたメンバーは、まち普請への応募を決めます。

移設後のお披露目会の様子。コミュニティカフェでの利用も期待される

まち普請のコンテストに向けて活動するうちに、メンバーはさらに増えていきました。町内会からの後押しもあって、畑にお休み処となるパーゴラやテーブル、ベンチやかまど、さらに太陽光発電設備を設置して、「まちのエコステーション」を整備するアイデアは見事コンテストを通過します。

ワークショップを何度も開催して、たくさんの地域の人たちに関わってもらいながら整備を進めてきましたが、いよいよ完成目前という段階で、畑を使用することができなくなってしまいました。この事態にメンバー全員が頭を抱えましたが、退去までの期間が短く、悩んでいる時間もありません。整備したパーゴラやテーブルなどを解体し、その保管場所を探しました。保管場所を提供してくれたのは、これまでグループの活動を見ていた地域の方でした。まち普請に挑戦する前から、地域の中で多様な活動をしていたことが力を発揮したのです。

モザイクタイルのテーブルは退去前の畑で製作。多くの人が参加した

すぐに次の整備場所を探しますが、なかなか条件に合う場所が見つかりません。しかし、解体から2年が経過した頃、ついに空き家を活用してコミュニティカフェをはじめる団体が、熊野の森もろおかスタイルの活動に賛同し、カフェの庭を提供してくれることになりました。幸いにもDIYで整備したものが多かったので、新たな場所への移設作業も自分たちで協力して行い、令和2年1月にお披露目の会が催されました。最初に作りたかった畑の中の拠点ではありませんが、近くにある師岡町梅の丘公園市民農園と合わせてエコステーションの活動を行なっています。

お披露目会後に、新型コロナウイルス感染症が拡大し始めますが、屋外活動は比較的影響が少なく、親子連れの参加が増えたそうです。「子どもに自然とかかわる機会を持たせたかった」、「こういう場所を求めていた」という参加者の声も多く届いているとのこと。「たくさんの親子連れや様々な世代の人が畑仕事をするのを見ていて、こういう場所をつくってよかったと思う。コロナによって、たくさんの気づきがありました」と代表の肥後さんは語ります。

完成直前で移転を余儀なくされるというハードルを乗り越えて、熊野の森もろおかスタイルの活動は着実に地域に根を下ろし、すそ野を広げています。「親子連れで参加できるメニューをもっと増やそう」、「畑を増やさないか」という話も出てきており、さらには養蜂も始めるそうです。熊野の森もろおかスタイルの今後の展開にますます期待が高まります。

畑作業やエコストーブなどの実践は梅の丘公園で継続して行われている

※5：少量の燃料で高い火力を生み出すことができる燃焼効率の高いストーブ。別名ロケットストーブ。

※6：太陽光を利用して調理を行う器具。

太陽とコミュニティで耕すもろおかエコステーション（港北区）
整備主体…熊野の森もろおかスタイル
整備場所…港北区師岡町600
整備内容…交流拠点（パーゴラ、ベンチ等の製作）
竣工時期…令和2年1月
（平成30年1月に竣工後一度撤去）